

里守屋の忍術使いの話

太平洋の大海を呼ぶ

ある年のお正月に、仙宝院は、寺男の忍術使いの無明をつれて、長沼のお城へお年始に参られました。

お殿さまは無明を呼んで「お正月だによつてなにかやってみせよ」と申されました。

無明はかたくお断りをいたしましたがお殿様のたつてのおのぞみでしたので、

「そんじゃーお殿さまのお家繁盛と、佳きお正月をお祝い申し上げ、太平洋の大海をこのお庭にお引きいたしやしよう」「十数里も遠く離れた太平洋の大海を、このお城の庭にそんなことが本当にできるのか」

「へー、そりゃー大変むずかしいことでございやすが、お殿様のお威光をおかりいたしやすりゃーできるやもしれやせん どうか白扇一本おかし下さりませ。」

無明は、おかりした白扇を右手にもつて、お城の廊下のはしにたち、遠い遠い東山の山々にむかって口に何か、ムニャー ムニャーと唱え、白扇を上、下に大きくふり続け

ました。すると どうでしょう、東山の山々の峯々の頂に、白い雲の様なものもくもくと。

ところが、その白い雲のようなものから、波の音が、ザブーン ザザザザー ザブーン ザザザザー

荒波は、波音高く、荒れ、須賀川、木の崎、志茂村をのみこんで城壁にせまり、石垣にぶちあたる。そのすさまじさは、それは、石垣をいまにもくずさんばかりだった。

大波は、ますますそのいきおいを増して、とうとうお城の壁をのり越え、お城の庭にザブーン、ザブーンと押しよせたからたまりません。さあー これにはお殿さまも、ご家来衆も、きもをつぶさんばかりにおどろき、これは、天下の一大事と、奥のお部屋へ逃げ込みながら

「無明、無明、助けてくれー、水はもういらぬ、なんとかしてくれー」

「へーお殿さま、わかりやした、それじゃー水は、もどにもどしやしよう」と、持ったる白扇をこんどは、前後に、押し返すようにふりつづけますと、太平洋の荒波は、波音もしずまり、東山を越え、次第に太平洋へかえって行きま